

－ 資 料 －

ゆかたの製作にみる裁縫技能の現状

古田 貴美子

The Current Situation of the Sewing Skill for Producing Yukata

Kimiko FURUTA

要 旨

被服の製作実習では、入学前の裁縫経験が少なくなり、縫う技術が低下したと感じている。ゆかたの製作においては手縫いで作り上げることを目標にして、縫い方やくけ方を練習した後、製作に取り掛かるが、最近、縫製に要する時間が長くなり、縫い方の不良が多く見られるようになった。そこで、指導方法の見直しのために、2012年から10年間のゆかた作品の評価点を基に、手縫いの技術と部位別の出来映えに分け、評価点の低い技術について検討した。その結果、なみ縫いを一定の針目で縫うこと、「くけ」や「留め」を正しく行うことが難しいことが明らかになった。指導方法の改善につなげることができる。

キーワード：和裁，ゆかた，手縫い，評価，指導方法

1. はじめに

短期大学における和裁の実習時間は減少し、現在はゆかたを課題とする1科目だけである。必修科目ではないので履修人数は多くはないが、自分で作ったゆかたを着たいとの希望を持ち、意欲的に取り組む学生がほとんどである。しかし、最近は裁縫の経験が少なくなり、ゆかたを作る工程ごとと部位ごとに個別に教えなければ進められなくなっている。時間もかかるようになったことから、縫う技術が低下したことを感じているが、これまで実際にどの部分の技術が難しいのか検証したことはなかった。

筆者は、短期大学や大学の初年次から被服製作実習を担当し、2014年頃からはなみ縫いができない学生が多くなっていることに気づいた。2016年からは、指導の際、なみ縫いやまつり縫いの練習時間を設けた。その後、これらの基礎縫いの練習が技術の向上に効果があることを、作品の評価点を比較し確かめた¹⁾。1年次の実習ではミシンを使用するので、手縫いをするのはしつけ縫いのときだけで決して多くない。和裁は2年生前期の授業である。なみ縫いの針の持ち方、動かし方を理解することで、1年次より縫うスピードは向上するが、縫い目が美しいかどうかは別である。

一方、1回の実習授業時間は2コマ135分が基本であるが、今年は、ほとんどの学生が毎回180分程度行っていた。以前と同じ作業工程であってもより時間を要するようになった。指導は一斉に説明をする方法から、個別また少人数に説明する方法に変わっている。しるしつけが慎重で時間がかかったり、くけるだけで2時間かかったりした事実がある。どの部位が難しく時間がかかるのか確認するために、でき上がった作品の評価から手縫いの技術点を比較する。苦手部分を明らかにして、上達するように指導方法の改善を目指す。

2. 実習計画

ゆかたの製作は、短期大学2年次生に対して前期に開講している「被服構成実習（和裁）」の課題としている。筆者がゆかた製作を担当することになったのは2011年からで、被服実習の基本となる、1年生前期の「被服構成基礎実習」も担当している。授業回数は15回で、1回は90分×2コマの授業である。

本学の和裁の実習は、本授業だけであり、専門家になるための修練ではないので、目標はゆかたの構成を理解し、製作技術を身に付けることとしている。シラバスでは次のような目標と評価方法を示している。授業計画を表1に示す。

表1 授業計画 (2021年)

回	予 定	内 容	準 備
1	着物の構成、採寸	寸法表作成、基本の縫い方と練習	裁縫道具
2	柄合わせ・裁断	布の見積もり、なみ縫いとくけの練習	ゆかた地
3	柄合わせ・裁断	裁断、(布端の始末)	
4	袖	袖しるしつけ、袖下中縫い	糸
5	〃	袖下・袖口下縫い、袖口くけ	
6	身頃	身頃しるしつけ、背縫い	
7	〃	肩当て作り・つけ、居敷当て作り・つけ	さらし布
8	〃	わき縫い・始末	
9	衤(おくみ)	衤(おくみ)しるしつけ、衤下ぐけ	
10	身頃、衤(おくみ)	衤(おくみ)つけ・始末	
11	身頃	すそぐけ	
12	衤	衤しるしつけ、衤つけ	
13	〃	衤つけ、かけ衤つけ	
14	身頃、袖	袖つけ・始末	
15	仕上げ	門(かんぬき)留め	

手縫いの経験が少ない学生が製作を行うことに配慮して、筆者は道具の使用について、比較的柔軟に対応している。手指の巧緻性を考えると、和裁の指導書に見られる「運針」を課すことはストレスになり意欲を下げることになりかねない。また、ゆかた地は多種多様になり「へら」でしるしをつけにくいものが増えている。

(1) 目標

- ① 平面構成の衣服である着物の特徴を理解することができる。

② ゆかたの部位に適した縫い方を理解することができる。

③ 手縫いでゆかたを縫うことができる。

(2) 評価方法

作品70%，授業態度30%で評価

(3) 授業の準備

- ・教科書『図でわかる基礎きもの』呑山委佐子 阿部栄子 金谷喜子 木野内清子 著²⁾
- ・裁縫道具
- ・材料(ゆかた地・糸) *さらし布は一括で準備

(4) 指導の工夫

- ・初回に、手縫い(なみ縫い、くけ縫い)の練習をする。
- ・なみ縫いをするとき、指ぬきの有無、針の長さは自由とする。
- ・「へら」のしるしが見えにくいときには、チャコペーパーを使用する。
- ・アイロンと紙定規(折り幅をそろえる厚紙の方眼紙)を使用する。

3. 研究方法

作品の評価は、2012年から基準を決めて点数を付けている。筆者が1・2年生両学年の被服実習を担当し始めた2012年から2021年までの技術点を分析した。履修登録者数合計は71名、ゆかたを完成させた学生は68名である。

そのうち、2020年はコロナ禍で対面授業の制約があったため、手縫い(なみ縫い)をミシン縫いに替えて製作してもよいことにした。前年までとは内容と評価項目に違いがあったので、全体の評価方法を変えなければならなかった。手縫いの技術と部位別の評価点の比較から2020年の結果を除外する。

授業の成績評価方法を表2に示す。評価する対象は、作品の他に進度、提出状況である。作品の評価は、表3に示す基準により、誤りがあれば減点する方法で行った。手縫いの基本的な技術点は、7項目各5点で35点満点、各部位の評価点は、5項目各5点、25点満点である。たとえば、手縫いの技術点の項目1)なみ縫いは、針目が3～4mmでそろっていて美しいものを5点とし、針目が標準より大きいときや同じ針目で縫われていないとき、程度によって減点した。

表2 評価方法

評価項目	内 容
手縫いの技術 部分の出来映え その他の事項 毎回の進度 提出日	作品7項目…なみ縫い2項目、くけ3項目(折りぐけ、耳ぐけ、本ぐけ)、きせ、留め 作品5項目…各部位(袖、身頃、衿、衿つけ、衿) 作品 糸の始末など 各自の状況 締切日前に提出→加点、締切日に遅れて提出→減点

表3 作品の評価基準

評価	項目	目 標
手縫いの技術 (35点) 各項目 【5点】	1) なみ縫い 2) なみ縫い 3) 折りぐけ 4) 耳ぐけ 5) 本ぐけ 6) 留め 7) きせ	<ul style="list-style-type: none"> ・針目がそろっている ・縫い目は3～4mm程度 ・まっすぐ縫える ・折りぐけができる(三つ折りして、折り端を留めつける) ・耳ぐけができる(布の耳を留めつける) ・本ぐけができる(衿・掛け衿のくけ代を内側に折り、折り山を留めつける) ・適切に玉留めができる ・門(かんぬき)留めができる ・アイロンを使用し、縫い目から2mmで折っている
各部位の出来映え (25点) 各項目 【5点】	①袖 ②身頃 ③衿(おくみ) ④衿つけ ⑤衿・掛け衿	各部位について <ul style="list-style-type: none"> ・作り方やつけ方が正しい ・縫い方やくけ方が正しい ・左右の長さや幅が同じ ・ほころびがない縫い方、留め方をしている ・形が整っていて美しい ・表から見て針目が目立たない ・適切に折り目が付いている
その他 (10点)	全体	<ul style="list-style-type: none"> ・しるしの付け方が適切である ・しつけや糸印の始末ができています など

3. 結果および考察

各年度の実習成績は表4の通りである。履修登録したもののゆかたが完成しなかった者を除き、評価点の平均と標準偏差、最高点、最低点を示した。表5には、年度別に手縫いの技術点の平均と各部位の出来映え点の平均を示した。2020年は前述の理由により、なみ縫いの評価はなし、各部位の出来映えの一部と「くけ」は10点満点で評価した。その評価点を2で割り端数を切り捨て、参考値として示している。

実習成績については、2013年以外は平均が80点以上である。2013年は最高点が85点であり、他の年は90点以上得た者がいることに関係する。2016年、2019年は標準偏差が大きく最低点が各々65点、68点である。次に標準偏差が大きいのは2014年で、最低点は65点であった。この最低点は、1年次に「被服構成基礎実習」を履修しなかった学生の点数であり、特に苦勞してい

表4 被服構成実習(和裁)の履修者数と評価点

年度	登録人数 (人)	評価人数 (人)	評価点(／100点)			
			平均	標準偏差	最高点	最低点
2012	9	9	82.44	7.34	93	72
2013	5	5	79.2	5.11	85	70
2014	11	11	81.19	8.03	95	65
2015	6	6	83.33	5.44	90	75
2016	4	4	82.75	10.03	95	68
2017	10	10	82.9	5.01	92	73
2018	8	6	83.33	4.61	93	80
2019	7	6	84.67	9.03	91	65
2020	3	3	93.33	1.25	95	92
2021	8	8	83.38	5.24	91	74

表5 項目別技術の平均点

年度	評価人数 (人)	手縫いの技術							技術点合計 (/35点)
		1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	
2012年	9	4.44	4	4.22	4.67	4.22	3.22	4.44	29.22
2013年	5	4	4.2	4	4.2	3.8	4.4	4	28.60
2014年	11	4.27	3.91	3.55	3.91	4	3.82	4.36	27.82
2015年	6	4.67	4.17	4.17	4	4.5	4	4.5	30.00
2016年	4	4	4.25	4	4	4.25	4	4	28.50
2017年	10	4.5	4	3.89	3.9	4	4.1	4.4	28.70
2018年	6	3.83	4.2	4.17	4.83	3.67	3.33	4	27.83
2019年	6	4	4.4	4.5	4.67	4.17	4	4.83	30.50
2020年*	3	—	—	4.33	4.67	4.67	5	4.67	—
2021年	8	3.88	4.13	4.13	4.25	3.63	3.88	4.13	27.75

年度	評価人数 (人)	各部位の出来映え					各部位点合計 (/25点)	合計 (/60点)
		①	②	③	④	⑤		
2012年	9	4	4.33	4	3.89	3.78	20.00	49.22
2013年	5	3.4	3.8	4.2	4.2	4	19.60	48.20
2014年	11	3.73	3.82	3.91	3.64	3.64	18.73	46.55
2015年	6	3.83	4.17	3.83	3.67	4.17	19.67	49.67
2016年	4	4	4.5	4.75	3.25	4.25	20.75	49.25
2017年	10	3.9	4.3	3.8	3.8	3.5	19.30	48.00
2018年	6	4.33	4.17	4.17	3.5	3.33	19.50	47.33
2019年	6	4.33	4.67	3.67	3.8	4.33	20.83	51.00
2020年*	3	4	4	4.33	4.67	4.67	21.67	—
2021年	8	4.13	4	4.38	3.5	3.63	19.63	47.63

* 完成者のみ評価
 ※2020年は参考値

■ 年度の中で平均値の最低点

た。2020年はコロナ禍で4月から入構制限が行われたことの影響もあり、受講希望が少なかったと思われる。同年は、3人の受講者全員が90点台と良い成績であった。

(1) 手縫いの技術点の推移

手縫いの技術点の中で、なみ縫いの評価は、1) 針目が3～4mmでそろっているか、2) まっすぐ縫っているかをみる。評価の平均が4点未満だったのは、2014年、2018年、2021年であった。2012年、2014年、2015年、2017年は、1) の平均点が、2) の平均点より高い。2018年以降は針目をそろえることの方がまっすぐ縫うことより平均点が低くなっており、縫うときの針の動かし方に難しさがあると思われる。技術点合計が高いのは2019年、2015年で、最も低いのは2021年である。2019年と2021年の点数の差は2.75点だった。

3) 4) 5) の項目は「くけ」の評価である。三つの「くけ」の方法を年度で比較すると、2012年から2014年まで評価点が最も高いのは「折ぐけ」であり、2015年から2017年までは、「本ぐけ」であった。2018年以降は「耳ぐけ」が最も高かった。「耳ぐけ」は満点の5点より－1

点程度で、1か所の誤りにすぎない。注意して縫うときほど難しくない「くけ」と思われる。6)は玉留めの評価で、基本は見えないように裏側に、布から離れない位置で留める。全体的に、5点の学生が少ないことがわかった。7)は「きせ」の幅2mmで折っているかどうかをみている。この項目は平均点が4点以上なので、できている学生が多い。

各部位の出来映え合計点の平均は、18.73～20.83点で大きな点差はなかった。部位の中で低くなっているのは④衿つけと⑤衿の評価である。これらは他の部位の点数より低く、縫製が難しい箇所であることがわかる。

年度の比較をするために、手縫いの技術点を、A：大変良くできる(32～35点)、B：良くできる(28～31点)、C：概ねできる(24～27点)、D：できない部分がある(23点以下)の4段階に分け、年度別の分布を図1に示した。また、各部位の出来映え点を、A：大変良くできる(23～25点)、B：良くできる(20～22点)、C：概ねできる(17～19点)、D：できない部分がある(16点以下)の4段階に分け、年度別の分布を図2に示した。

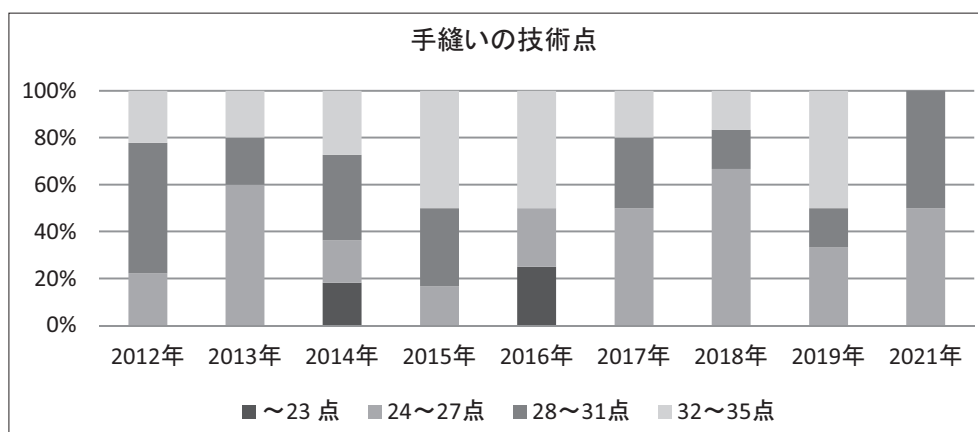


図1 手縫いの技術点の分布

手縫いの技術点では、毎年、Aの技術を持つ者がいるが、2021年をみると0人で、Bは50%である。AとBを合わせた割合が最も多かったのは、2015年で83.8%である。次に多いのは2012年で77.8%、2019年は66.7%だった。手縫いの技術点の平均点が高いのは2019年、2015年、2012年である。この3年の平均点の差は1.28点の範囲でありほとんど変わらない。

部位別の評価では、Aは2012年～2019年、2021年の受講生65人中6人で、Dは7人だった。部位別評価点がB以上の割合は、2019年が83.3%、2016年が75%、2015年が66.7%、2021年が62.5%である。2021年は手縫いの技術点平均が最も低いが、部位別評価つまり出来映えは最低でなかった。

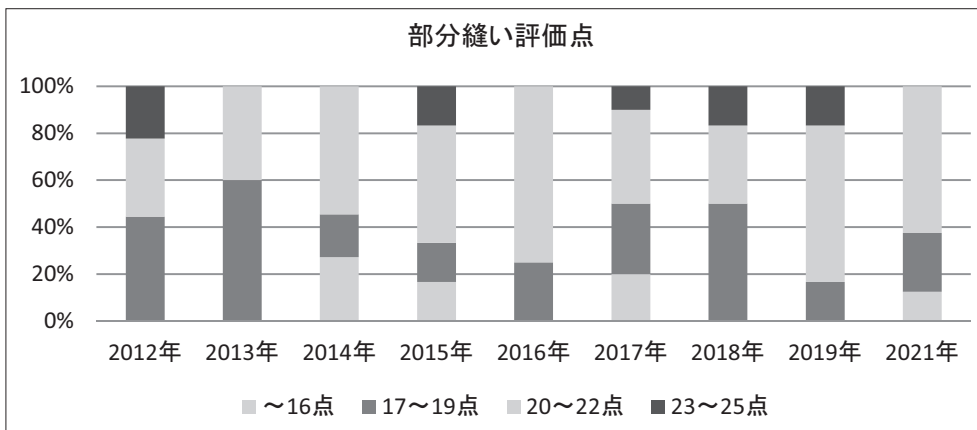


図2 部位別評価点の分布

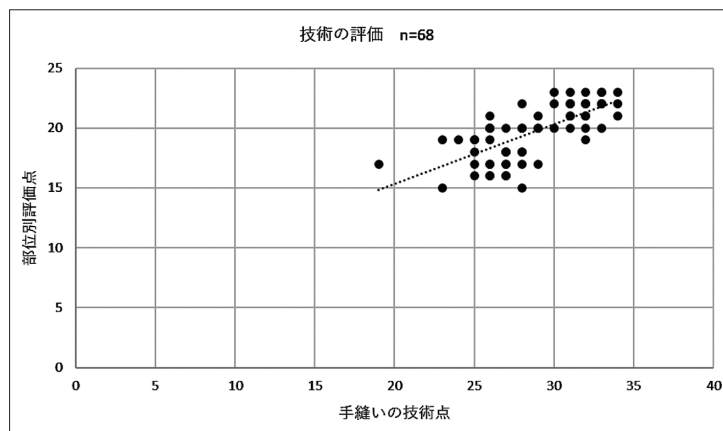


図3 手縫いの技術点と部位別評価点の関係

次に、手縫いの技術点と出来映えとの関係を確認するために、受講者全員について部位別評価点との関係を図3に示した。手縫いの技術が高いほど部位別の評価が高いことがわかるが、同じ部位別評価点でも、技術点が10点違う場合がある。技術が高なくても出来栄がよいと評価されることがある。一方、技術は高いのに出来映えが良くないと評価されることもある。部位別評価点が17点では技術点が19～29点まで広がっており、同様に、部位別評価点が19点のとき技術点は23～32点までと差が大きい。

(2) 手縫い技術項目の比較

手縫いのうちどの技術が難しいのかを確認するために、各年度に技術点が最も低かった13人の項目ごとの評価点を表6に示している。図4は項目ごとの評価点の分布である。

表6 各年度最低評価の技術点

年度	技術点 (/60点)	手縫い技術の評価項目(点)							各部位の評価項目(点)				
		1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	①	②	③	④	⑤
2012年	42	5	4	3	4	3	3	3	3	4	3	4	3
2013年	45	4	5	3	3	4	4	3	3	4	4	4	4
	45	3	4	3	4	3	5	5	4	3	4	4	3
2014年	36	3	3	2	2	2	3	4	3	3	4	4	3
2015年	42	4	4	3	3	4	4	4	3	3	3	3	4
2016年	42	4	3	3	3	3	3	4	4	4	5	3	3
2017年	43	4	4	4	4	3	4	4	3	4	3	3	3
	43	4	4	3	4	4	4	4	3	4	3	3	3
	43	4	3	3	3	4	4	3	4	4	4	4	3
	43	4	4	4	4	3	4	3	4	3	4	3	4
2018年	43	4	3	4	5	3	3	4	4	4	3	3	3
2019年	42	4	4	4	4	4	3	4	3	3	3	2	4
2021年	41	4	5	3	4	2	3	4	3	4	3	3	3
平均	42.31	3.92	3.8	3.23	3.54	3.31	3.54	3.85	3.31	3.69	3.46	3.38	3.23

■ 最高点 ■ 最低点

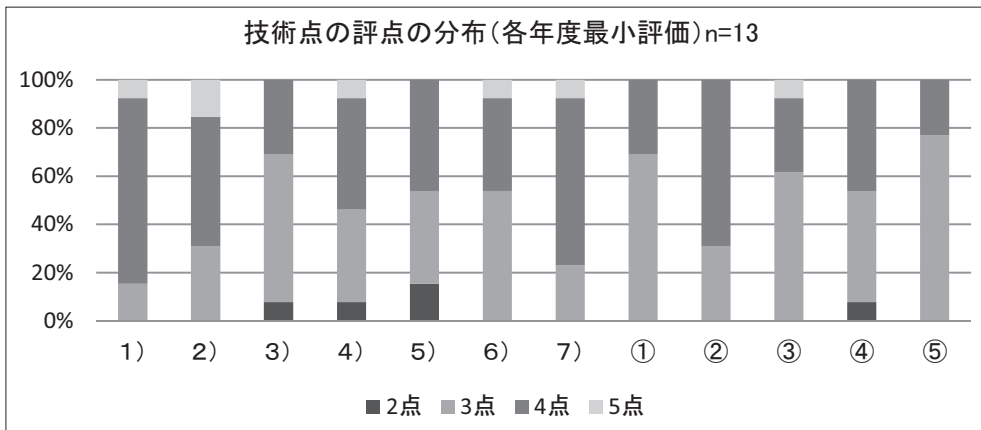


図4 各年度最低点の評価点の分布

技術点が最も低いのは2014年の1名で、60点中36点で「くけ」が3項目とも2点であった。なみ縫いや「留め」も3点で良くはなかったが、各部位の出来映えは4点が2項目あり、難しい衿つけは4点で特別に出来映えが悪い訳ではない。形よく作ることはできるので、縫い方とくけ方の練習が不足していたと推測できる。

表6に示した13人の手縫いの技術項目の平均点は3.23点から3.92点で、なみ縫いより「くけ」の平均点の方が低い。また、「留め」も低い点数で、半数以上の7人が3点であった。3つのくけ方のうち、最も評価が低い(すべて同評価だった3人を除く)のは、折りぐけが6人、耳ぐけが4人、本ぐけが5人だった。折り山の中に針を通す「くけ」の仕方に難しさがありそうである。

各部位の出来映え評価項目の平均点は、3.23点から3.69点だった。この中で最も低いのは身

頃部分で、次に衿つけだった。衿つけ首回りはゆかたの部位で唯一、曲線になっており、真っすぐ裁断している衿を縫い合わせなければいけないので、かなり難しい部位である。それに対して、身頃での減点は縫い方の誤りのためであった。

(3) 裁縫技術の誤り箇所

筆者は作品の評価をするときに、減点理由を書き留めるようにしている。表7に、2021年と2019年以前の、手縫いの技術と各部位の評価理由のうち減点箇所をまとめた。なみ縫いでは、針目が大きすぎることと針目の不ぞろい、縫い曲がりがあることが主な減点理由である。

表7 評価時の減点理由

手縫いの技術	2021年			2019年以前		
	1) なみ縫い	針目大きい 針目大きい所あり5~6mm 針目大きい所あり5mm	針目 不ぞろい		針目大きい7~8mm 針目大きい6~7mm 針目大きい5~6mm	糸引きゆるい
2) なみ縫い	曲がっている 曲がりあり			曲がっている		
3) 折りぐけ	針目間隔大きい1.5~3cm 針目間隔大きい2.5~3cm	折り山より上に糸見える	糸引きゆるい	表の針目大きい	針目間隔大きい2~3cm 針目間隔大きい2倍	糸引きゆるい 斜めに糸が入入り
4) 耳ぐけ	表の針目大きい 表の針目大きい所あり	針目間隔大きい 針目間隔小さい		表針目大きい3~4mm 表針目大きい2~3mm	針目間隔大きい5cm 針目間隔小さい1.5cm	引っ張りすぎている 糸引きゆるい
5) 本ぐけ	仕方の誤り 時々折りぐけになる 糸が見える	針目間隔不ぞろい	糸流れあり 斜めに糸流れている	表から糸が見える	針目間隔大きい1.5倍 針目間隔大きい1.5~2cm 針目間隔小さい	糸引きゆるい 糸引きゆるい 斜めに糸が渡っている
6) きせ	かけていない	アイロンがゆるい		きせ幅大きい	アイロン不十分	
7) 留め	玉留め見える所あり	門止め誤り		玉留め見える	糸始末不十分	
各部位	2021年			2019年以前		
①袖	袖の形 曲がり有 袖の形 やや曲がり	袖口を耳ぐけ(本来折りぐけ) 袖口留めがゆるい	袖つけのきせなし	袖つけ位置のずれ 糸引き過ぎて形不良	袖口三つ折りぐけ不良	
②身頃	裾曲がり 裾三つ折り幅不ぞろい	裾の三つ折りぐけ3cm間隔	すそ玉留め見える	裾曲がり 幅の広い狭いがある	裾の折りぐけ 2cm間隔 裾ぐけ表に2目耳ぐけ	背縫いきせ小さい 肩当てのとし間違 わきの押えとし間違
③衿	衿下長さ違い 衿下の三つ折り幅不ぞろい			衿下長さ違い 衿幅違い	衿下ぐけ 誤り	衿つけにしわ
④衿つけ	衿つけのだぶり有 衿つけ曲がり 剣先はずれ 衿幅内側で合わせ1cm狭い	衿肩あきにしわ 左肩あきタック状 縫いつれあり	本ぐけの針目 表側見える 表から糸が見える 折りぐけした(本来本ぐけ)	衿つけ曲がり 剣先はずれ 剣先長さ 違い	縫いつれあり	本ぐけの針目見える 折りぐけした(本来本ぐけ)
⑤衿	掛け衿つけ誤り	衿先のきせなし 掛け衿つけに白糸使用		掛け衿なし 掛け衿つけ不十分	衿先斜め つけ止まり曲がり 掛け衿の角丸い	折りぐけした(本来本ぐけ)

「くけ」については表に見える針目の大きいこと、針目間隔が大きすぎるまた小さすぎることでやくけ方そのものの誤りも見られる。針目を大きくして縫うとスピードアップにつながるの、急ぐときにしがちなことである。それに対しては、縫い合わせの甘さがほころびにつながることを想像できれば、適切な針目と針目間隔で縫えるはずである。

各部位では、袖の形、身頃のすそ曲がり、衿の幅と長さの左右の違い、身頃と衿のしるしの合わせ方、掛け衿つけに誤りがある。各部位の形とその長さや幅が左右同じで整っているかは、しるしつけにも関係がある。物差しとへらを使って、しるしを正しくつけることが重要である。各部位の縫製に取り掛かる前には、教科書を見て縫い方とくけ方を確認する。実際にゆかたを前に説明したときには理解したと返事をするが、早合点していることがあったり、理解度が低

かったりすることがあるかもしれない。また、部位によって決められた「くけ」を間違った方法でしていることが多かった。「くけ」は、2枚の布の間で、針目が流れないように布に針を刺すことが大事で、上下の布を交互にすくうことをくり返す。「くけ」の不良には、糸の引き方のゆるさや引っ張りすぎもあり、糸の流れも見られた。指導の際には、手指の動きの練習だけでなく、くけ方の理解が必要なことが示唆された。

ゆかた作品の部位別評価は、袖・身頃・衽・衿つけ・衿の各部位で、作り方と形の美しさをみている。着物の裁縫では、縫い目を隠す「きせ」の方法があるので、アイロンの丁寧さにより出来映えが良くなる。

2020年のゆかた製作では、なみ縫いをミシン縫いに替えたことにより、手縫いより時間が短縮されるとともに、針目が一定で曲がり少なかった。さらに「くけ」は手縫いであるしかないが、方法を誤ることなくできたので、全体的に出来映えが良かった。なみ縫いに要する時間が減り、「くけ」に費やす時間と集中の仕方に良い影響があったと推察する。しかし、和裁の授業としてはミシンの使用を特例としたい。

5. おわりに

技術点が最も低いのは2014年の1名で、60点中36点で「くけ」が3項目とも2点であった。なみ縫いや「留め」も3点で良くはなかったが、各部位の出来映えは4点が2項目あり、難しい衿つけは4点で特別に出来映えが悪い訳ではない。形よく作ることはできるので、縫い方とくけ方の練習が不足していたと推測する。

1年次の『被服構成基礎実習』において、なみ縫いの練習を始めたのは2016年からである。大学入学以前に被服実習の経験が少ない学生が多くなり、針の持ち方と布の持ち方、針の動かし方を確認するようになった。実習課題のスカートやブラウスのミシン縫いの前にする「しつけ縫い」で、なみ縫いを練習することになるが、洋裁である「しつけ縫い」は針目が0.5～1cmと大きくてもよいので、2年次のゆかた製作にあたってなみ縫いの針目が美しいかどうか、速く縫えるかどうかは、巧緻性も関係して個人差が生じる。

和裁の教科書には基礎の技術として必ず、運針、糸の結び方、糸の留め方、縫い方、くけ方が掲載されている。学生に負荷をかけすぎないように留意し指導しているが、「くけ」は必須の技術である。今回、なみ縫いを一定の針目3～4mmで縫うことの他に「くけ」や「留め」を正しくすることが難しいことが明らかになった。今後は、基本縫いの練習のときに「くけ」の練習を増やすとともに、方法を理解するよう指導を工夫したい。手縫いの技術を練習すると出来映えが良くなるのか、今後も検討を続ける。

引用文献

- 1) 古田貴美子：被服製作実習における基礎縫い練習の効果，神戸女子短期大学論叢，第63巻，59～67（2018）
- 2) 呑山委佐子 阿部栄子 金谷喜子 木野内清子：図でわかる基礎きもの，おうふう（2008）

参考文献

- 3) 滝沢ヒロ子著 大妻コタカ監修：新しい和裁全書，永岡書店（2009）
- 4) 奈良女子大学・被服構成研究会 米沢光 水梨サワ子：改定裁縫要義 上巻，東洋図書（1973）
- 5) 主婦の友社編著：和裁全書，主婦の友社（1956）
- 6) 古田貴美子：女子大生の被服実習に対する意識と基本縫いの技術に関する考察，神戸女子短期大学論叢，第62巻，15～25（2017）

